

『草創期メルボルンの年代記 (1835-1852)』にみるハーリング

榎本雅之

Masayuki Enomoto

滋賀大学 経済学部 / 准教授

I はじめに

アイルランドでは、ハーリングやゲーリック・フットボールといった独自の民族的娯楽 (national pastimes) が広く行われている。ハーリングは、スティックとボールを用いたフィールド・ゲームで、ホッケーによく似ている。その歴史は古く、紀元前から行われ、アイルランド島各地に記録が存在する¹⁾。現在、GAA (the Gaelic Athletic Association) がハーリングの運営を行っており、アイリッシュ・アイデンティティを表象するスポーツとして、国民の人気を得ている。GAAは、イギリス産の近代スポーツがアイルランドに流入することに抵抗し、自国の民族的娯楽を保護することを目的に1884年に設立された。そして、設立期からイギリスへの抵抗運動を行うナショナリストたちが執行部に名を連ね、独立戦争期や北アイルランド紛争が激化する時期など、歴史的に対イギリスの政治活動と結びついてきた。

ハーリングの歴史に関する研究は、キング²⁾やオ・マオルファバイル³⁾などの通史のほか、GAA史研究⁴⁾の中で多くの言及がある。また、地方史やクラブ史でハーリングの歴史が明らかにされている⁵⁾。これらの研究によると、18世紀頃、地主などのパトロンを得た各地のハーリングが、郡と郡、街

1) KING, Séamus J., *A History of Hurling*, Dublin: Gill & Macmillan, 1998, pp. 1-24.

2) Ibid.

3) Ó MAOLFABHAIL, Art, *Caman 2,000 Years of Hurling in Ireland an Attempt to Trace the History and Development of the Stick-and-ball Game in Ireland During the Past 2,000 Years*, Dundalk: Dundalgan Press, 1973.

4) PUIRSÉAL, Pudraig, *The GAA, In Its Time*, Dublin: Ward River Press 1982; DE BÛRCA, Marcus, *The GAA, A History*, Dublin: Gill&Macmillan, 2000.など。

と街などの単位で試合を行い、黄金期を迎える。ところが、19世紀になるとハーリングは衰退していく。このことに関して、ルースは3つの理由があったことを指摘している。それは、1801年にイギリスとの連合法(the Act of Union)が制定されて以降、アイルランド的なゲームが避けられたこと、クリケットがイングランドから流入してきたこと、1840年代頃には農民のゲームとみなされるようになってきたことである⁶⁾。さらに、1840年代にアイルランドを襲った大飢饉も、ハーリング衰退の要因である⁷⁾。1846年から1851年の間に100万から150万の人々が飢饉により亡くなった。また、アイルランドからイギリスやアメリカなどへ多くの人々が移住し、1845年から1851年の間に、およそ820万の人口から、合わせて222万5千人が消え去った⁸⁾。大飢饉の被害を強く受けたのは、農村部の貧しい人々だった。アイルランドの民族的な文化の担い手だった西部や南部の被害は特に深刻で、アイルランド語や独特の文化が衰退した。こうして、GAAが設立されるまでの19世紀の間に、アイルランド島でのハーリングは徐々に行われなくなっていった。

19世紀のハーリング史に関する先行研究は、ハーリングが衰退した状況の中、GAAが誕生し、近代スポーツ化され、イギリス産の近代スポーツとの対立などを経て、アイルランドを象徴するス

ポーツとなる過程を明らかにしてきた⁹⁾。本研究は、海外へ移住したアイルランドの人々に着目し、ハーリングの実相を明らかにすることによって、これまでのアイルランド島を中心としたハーリング史研究に新たな知見を加えることを目的とする。そのために、『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』(The Chronicles of Early Melbourne, 1835 to 1852)』のハーリングに関する記述に焦点を当て、19世紀半ばのメルボルンで行われていたハーリングの実相を明らかにする。

本研究では、まず、先行研究や当時の旅行記から、19世紀に行われていたハーリングについて整理する。そして、『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』の第50章「オレンジと緑；あるいはハーリングと射撃」の記述を中心に、19世紀半ば、メルボルンで行われたハーリングについて検討する。また、ポート・フィリップ・ガゼッタ紙(the Port Phillip Gazzete、以下ガゼッタ紙)やポート・フィリップ・パトリオット・アンド・メルボルン・アドバタイザー紙(the Port Phillip Patriot and Melbourne Advertiser、以下アドバタイザー紙)など国立オーストラリア図書館でデジタル化されている同時期のメルボルンの新聞を補足史料として用いる。

5) O'SULLIVAN, Donal, *Sport in Cork, A History*, Dublin: History Press Ireland, 2010; CURRAN, Conor, *Sport in Donegal, A History*, History Press Ireland, 2010; HUNT, Tom, *Sport and Society in Victorian Ireland, the Case of Westmeath*, Cork: Cork University Press, 2007.など。

6) ROUSE, Paul, *Sport & Ireland, A History*, Oxford: Oxford University Press, 2015, pp. 91-92.

7) COMERFORD, Richard Vincent, *Ireland*, London: Oxford University Press, 2003, p. 216.

8) Ó CORRÁIN, Donnchadh, 'The Great Famine, 1845-9', Ó CORRÁIN, Donnchadh., and O'RIORDAN, Tomás. ed., *Ireland 1815-1870*, Dublin: Four Courts Press, 2011, p.77.

9) 例 えば、MANDLE, W. F., 'The Gaelic Athletic Association and Popular Culture, 1884-1924', *Irish Culture And Nationalism, 1750-1950*, Hampshire and London: Macmillan Press, 1985.; MANDLE, W. F., 'Sports as Politics: the Gaelic Athletic Association 1884-1916' *Sport in history: the making of modern sporting history*, Queensland: University of Queensland Press, 1979, pp.99-123.; ROUSE, Paul., 'The Political of Culture and Sport in Ireland: A History of the GAA Ban on Foreign Games 1884-1971. Part One: 1884-1921' *The International Journal of The History of Sports* Vol.10, No.3, 1993, pp.333-360.; 石井昌幸「黎明期のゲール運動競技協会に関する覚え書き」スポーツ史研究 第9号、1996、pp.49-57.など。

II 史料について

『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』はギャリーオーウェン(Garryowen)のペンネームで知られるエドモンド・フィン(Edmund Finn: 1819-1898)によって執筆され、1888年に出版された。フィンは、1819年、アイルランドのティペラリーの裕福な家庭に生まれ、カトリックの司祭になるための教育を受けた¹⁰⁾。しかし、彼は司祭にはならなかった。フィンは家族とともに、1841年7月にメルボルンに移住する。メルボルンのポート・フィリップに着いてから最初の4年間、彼が22歳から26歳の期間、何をしていたのか不明である。



写真 Edmund Finn (La Trobe Picture Collection, State Library of Victoria, H3494)

フィンは1845年から、週2回刊行のポート・フィリップ・ヘラルド紙(*the Port Phillip Herald*, 以下ヘラルド紙)でフルタイムの職員として働く。彼は優れたジャーナリストとして、時代の論争や不祥事に関する多くの記事を書いた。そして、26歳から39歳にかけての13年間、ジャーナリストとして過ごした。彼が記事を書いたヘラルド紙は、「メルボルン・クラブや自称貴族集団の半公式の機関誌」と否定的な評価を受けていた。しかし、アイルランド主義、ローマ・カトリック主義に加えて、彼の型破りの性格はヘラルド紙の方針にバランスをもたらし、ポート・フィリップの識字能力のある労働者階級に読者を広げた。また、彼の論調は、他の新聞との論争をもたらし、アルガス紙(*the Argus*)は彼を、中世のアイルランドの王である「ブライアン・ボルー」や、「ヘラルド・モンキー」と揶揄した¹¹⁾。

1860年代、ジャーナリストを辞めた後、アイルランド移民の互助会である聖パトリック会(St. Patrick Society)の会長を務める。彼は恵まれないアイルランド移民の為の、慈善活動の取次や居心地のいい集まりの場としての協会の活動を拡大させる必要性を感じていた。また、アイルランド・ナショナリストでヴィクトリア州の首長を務めたチャールズ・ギャヴァン・ダフィ(Charles Gavan Duffy)とも親交があった¹²⁾。ダフィは、フィンにメルボルンの歴史を書くよう勧めた。1860年代の半ばごろから、フィンは草創期メルボルンの歴史が忘れ去られていくことを憂慮していた。そして、新聞や雑誌にかつてのメルボルンの様子や当時活躍した人物のことを寄稿するとともに、過去の重要な記事を集めた小冊子を作成した。1888年に完

10) Australian Dictionary of Biography. (<http://adb.anu.edu.au/biography/finn-edmund-2042>, 閲覧日2017年8月17日)

11) CANNON, Michael, "The life of Edmund Finn", *The Chronicles of Early Melbourne 1835 to 1852, Vol. 3.*, Melbourne: Heritage Pubs., 1976, p. 5.

12) Ibid., p. 7.

13) Ibid., pp. 8-10.

14) KING, op. cit., p. 11.

15) アイルランドの地方行政の区画。アイルランド共和国に26のカウンティ、北アイルランドに6つのカウンティがある。

成した『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』は2巻で合わせて1,000頁にもなる大著である。出版時、メルボルンの新聞各紙から好評価を得た¹³⁾。

『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』は、当時活躍したジャーナリストによって書かれた、メルボルンの社会状況を知る史料として、一定の価値を持つ。ただし、執筆者であるフィン、カトリックの教育を受け、自身のルーツであるアイルランドを重要視し、アイルランド・コミュニティの活動に関わり、さらに、アイルランド・ナショナリストと厚い親交のあった人物である。したがって、今回用いる史料の記述は、アイルランド・カトリックに好意的な執筆者が書いたことを考慮する必要がある。

III GAA設立以前の 19世紀のハーリング

17世紀から18世紀にかけて、アイルランド各地で様々な形式でハーリングが行われていた。それは、イングランドでクリケットが各地で行われるようになった経緯に似ており、貴族や領主が自らの土地の農民を集め、チームを作ることによって拡大していく¹⁴⁾。やがて、試合はカウンティ¹⁵⁾を越えて行われるようになった。例えば、キングは、1768年にカウンティ・キルケニーとカウンティ・ティペラリーの試合が行われたことやマンスター¹⁶⁾地域とレンスター地域の地域対抗戦が行われる広告が掲載されたことを指摘している¹⁷⁾。カウンティを代表するチームを結成し、遠征するような規模の試合はエリート層の支援なしでは実現しない¹⁸⁾。

18世紀までの時期において、競技を統括する組織や統一されたルール存在は確認できないものの、アイルランド各地で、スティックとボールを用い、集団で対戦するゲームが行われた。そして、このゲームは、町や村の中だけで行われたのではなく、エリート層の支援を得て、カウンティを越えて遠征するような試合が行われていた。

アイルランド各地で行われていたハーリングは、19世紀になると徐々に行われなくなっていく。19世紀初頭のハーリングの記録は、新聞記事などに点在するに留まる。1843年10月28日のフリーマンズ・ジャーナル紙(*the Freeman's Journal*)には、ダブリンのストリートでハーリングをしていたために、罰金が課されたとの記事がある。ほかには、当時の旅行記にハーリングの詳しい叙述がある。1825年にアイルランドを旅したホール夫妻が1841年から1843年の間に『アイルランド、その風景、特徴など(*Ireland, its scenery, character, etc.*)』と題した書物を三冊出版した¹⁹⁾。その中で、カウンティ・ケリーで行われたハーリングが詳細に書かれており、19世紀初頭のハーリングの実相を知ることができる。ここではその概要を述べる。

「ハーレー(Hurley)」はケリーの、そしてアイルランド南部の素晴らしいゲームである。ただし、このゲームはイングランドではほとんど知られておらず、かなり珍しい²⁰⁾。街対抗や教区対抗、郡対抗で行われ、カウンティ対抗で行われることも珍しくない²¹⁾。ハーレーは、農民たちの競技で、非常に危険だが、素晴らしい男性の運動である。熟練のハーラー(ハーレーの選手)になるためには、並外れた運動能力を持たなければならない。その条件

16) アイルランドを東西南北、4つの地方に分けた区分。北部アルスター、東部レンスター、南部アルスター、西部コナートに分けられる。

17) KING, op. cit., pp. 19-20.

18) ROUSE, op. cit. 2015, p. 78.

19) Ó MAOLFABHAIL, op. cit., p. 36.

20) Hall, Mr. and Mrs. S. C., *Ireland: its scenery, character, &c; v.1*, London: How&Parsons, 1841, p. 256.

21) Ibid. p. 258. : この叙述から、19世紀半ばの大飢饉以前には、アイルランド南部の広い地域で、ハーリングが行われていたと考えることができる。



図1. アイルランド(ケリー)のハーリング(ハーレー)
Hall, S. & C. *Ireland: its scenery, character etc., Volumes.*
London: How & Parsons, 1841, p. 257.

として、鋭敏な視覚、手の器用さ、力強い腕のほか、走るのが速いこと、レスリングに熟練していること、意思が強いこと²²⁾を挙げている。ハーレーはクリケットによく似た点もあるが、ルールやバットの形状が完全に異なると指摘しており、バットの違いについては、クリケットのバットが直線であるのに対して、ハーレーのバットは曲がっていることだ²³⁾(図1参照)と述べている。

ゲーム開始の前に、両チームの「リーダー」が真ん中に集まり調整される。ゲームはボールを投げあげて開始される。別々の集団から選ばれた、時には50人から60人にもなる選手は、その合図を、並んで、向かい合って、ハーレーを交差させて待つ。ウィケット或いはゴールはフィールドの端に設置されている。プレーの性質から、平らで広大な平原が必要になる。2人の選ばれた選手が、それぞれのゴールを守る。ゴールキーパーの任務は、ゴール

に向かうボールを止めることである。選手は全力で、対戦相手の向こう側にあるウィケットの間にボールを通そうとする²⁴⁾。

ホール夫妻は、このゲームの様子を生き活きと描いている。

今、模擬戦争の火蓋が切られた。ハーレー同士がガチガチぶつかる。何度もボールが打たれるが、数分間、どちらのゴールにも近づかない。そして、幸運にも誰かが完全な「バック」をした時、フィールドの上をボールが飛んでいく。選手は皆、ボールを全力で追い、驚くべき素早さで相手と取っ組み合い、ねじ伏せ、たたきつける。勝者も打ち負かされた者も、一息いれることを望んでいない。目標物が転がり、飛んだ軌跡を追いかける。走るのが速い選手たちは、互いを警戒し、プレーの間、肩と肩をぶつけ合う。レスリングが巧みな選手は、相手の進行を止めたり、遅らせたりするために接近する。地面にあるボールを手で拾い上げてはならない。ハーレーの先端でボールを扱う巧みさと技術を示し、フィールドの半分をボールとともに走り抜け、相手に接近され、プレッシャーを受けた時、ゴールに向かってボールを打つ。これらのプレーは、競技に精通している人々を、わずかにではあるが驚かす。ゴールを狙うことは、戦いの最重要の矛先である。ゴールキーパーは目標物(ボール)を取り、戦闘に加わっている選手をサポートするために、全力でフィールドの反対のサイドに走る。芝の上には、数ダースの倒れた選手がいる。ボールは力強く打たれ、選手たちの上を越えて、反対側のゴールへと向かう。このような戦いが

22) Ibid. p. 257.

23) Ibid., pp. 256-7.

24) Ibid., p. 257.

数時間にわたって行われる。勝者のないまま、夜の闇がゲームを終わらせることもある。このゲームに参加することは、危険を伴い、時には致命的な結果を招くこともある²⁵⁾。

この描写から、ゲームの目的は得点数を競うのではなく、先に得点することであり、スティック(ハーレー)を持った選手たちで構成された二つのチームによる攻防が、フィールド上で時間の定めなく展開され続けるゲームであることがわかる。地面からボールを拾い上げることが禁止されていることがわざわざ書かれており、他のスティックゲームにはない特徴的なルールとしてホール夫妻は考えた可能性がある。また、ゲームは激しく進行し、倒れていく選手もいたようである。

試合は、異なる街や教区の対戦、郡の対抗戦、まれにカウンティの対抗戦が行われた。(略)50年ほど前、ダブリンのフェニックス・パークでマンスターの人々とレンスターの人々が対戦した有名な試合がある。それはアイルランド総督と他の貴族が催した。そこには総督の配下の全ての貴族や紳士が出席し、美しい人々や、アイルランドの首都の社交界、その関連の人々が集まった。勝利を目指して争われ、長い時間の間に様々な成功があった、そして最終的にマンスターの人々が勝利した。マンスターの選手がハーレーの先端にボールを乗せて走り、総督邸の開いた窓にボールを打ち込んだ。この機動作戦は、レンスターのゴールマンの警戒を突破し、ボールをゴールに入れ、勝利を手にした。この人物は存命である。彼の名は、マット・ヒーリー (Mat.

Healy)。長い間ロンドンで暮らしている。25年から30年前、ケニントン・コモン (Kennington Common) で聖ジャイルズ(St. Gile's)の人々とロンドンの東部の人々の間で、何度か試合が行われた。この出来事は著名なバリモア卿 (Lord Barrymore) や当時のスポーツサークルにいた貴族たちによって催された²⁶⁾。

このように、街や教区など、居住地や出身地を基盤としてチームが構成され、ゲームが行われている。また、これらの試合は、上流階級の人々によって催されていた。そして、この記述から、ロンドンでもハーリングが行われたことが示された。

アイルランド島以外で行われたハーリングの記録は新聞記事にいくつかある。例えば、1768年10月1日のフリーマンズ・ジャーナル紙にロンドンで行われたハーリングの試合についての報道がある。

9月21日水曜日、カウンティ・ミースのジェントルマンとカウンティ・ケリーのジェントルマンによる20ギニーを賭けた素晴らしいハーリングの試合が、ロンドンのブルームズベリー (Bloomsbury) のロング・フィールドで行われた。激しい試合の後、ミースのジェントルマンが勝利した²⁷⁾。

この記事では試合を行ったのは、「ジェントルマン」と称される人たちであった。他にも、先行研究によって、1750年にパリの公園でハーリングが行われたことや、1780年代にニューヨークでハーリングに関する広告が新聞に掲載されたことの指摘がある²⁸⁾。このように、アイルランド島以外で行われ

25) Ibid., pp. 257-8.

26) Ibid., p. 258.

27) *the Freemans Journal*, 1768年10月1日。

28) ROUSE, op. cit., 2015, pp. 75-76.

たハーリングに関しては、断片的に明らかにされてきた。

アイルランド移民によってオーストラリアで行われたハーリングについては、ブラッケンの研究が詳しい²⁹⁾。ハーリングは、1872年以後のオーストラリアにおいて、ヒベルニアン・オーストラリアン・カトリック共済組合 (the Hibernian Australian Catholic Benefit Society) によって運営された聖パトリックの日(3月17日)の祭事に付随する行事となっていた。やがて、アイルランド移民にとっての重要なレクリエーション活動となり、1870年代の後半になると、ハーリングクラブが結成される。さらに、1878年には、ヴィクトリア州のいくつかのハーリングクラブにより、ヴィクトリア州ハーリング協会 (the Victorian Hurling Association) が設立、植民地でのゲームの規則を作った。ハーリングが盛んだったのは、ヴィクトリア州やニュー・サウス・ウェールズ州だったが、クイーンズランド州、西オーストラリア州、タスマニア州にも広がった³⁰⁾。

以上のように、GAA設立以前のハーリングは、統一されたルールが存在せず、アイルランド各地で様々な形式で行われた。それは、スティックを用いた、集団で行うフィールド・ゲームで、非常に激しく、怪我がつきものであるような内容だった。このゲームは、アイルランド島だけにとどまらず、アイルランドの人々が移住した先でも、プレーされていた。対戦形式が、集まった選手の出身地や居住地でチームを構成していたため、クラブを結成していない。そのため基盤となる組織が存在せず、ゲームの記録が点在し、時系列に競技の変遷を明らかに

することは難しい。GAA設立以前のハーリングについて、これまでのところ、点在する記録を収集する作業が続けられている。

IV 宗派对立とハーリング

『草創期メルボルンの年代記 (1835-1852)』で紹介されるハーリングは、カトリックとプロテスタントの対立のコンテキストの中、行われる。

1842年、メルボルンで聖パトリック会が設立された。この組織はアイルランドのカトリック教徒の守護聖人の名を冠しているが、参加資格はアイルランド生まれということであり、その評議委員会の構成は、国教徒が9人、長老派が5人、カトリックが5人で、会長は国教徒であった。聖パトリックの日のパレードも、このような状況を反映していた。儀仗を持った2人のメンバーに続いて最初に登場するのは、ユニオン・ジャックであり、後に現れる聖パトリックの旗と並んでいた。楽隊は「ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン」を演奏し、沿道では、アイルランドを象徴する緑の旗とユニオン・ジャックが混在していた³¹⁾。対して、1843年に北部アイルランドの人々とスコットランドの人々が、オレンジ連合 (the Orange Confederation) を結成した³²⁾。この組織は、アイルランドを侵攻した「ウィリアム3世の信心深くそして不朽の名声」を永続させることを目的に設立された³³⁾。つまり、草創期のメルボルンにおいて、聖パトリック会は全てのアイルランド移民の互助会として、オレンジ連合はアイルランド・プロテスタントの集まりとして誕生した。

29) BRACKEN, Patrick, 'The emergence of hurling in Australia 1877-1917', *Sport in Society* 2016, Vol. 19, No. 1, pp. 62-73.

30) *Ibid.*, pp. 62-64.

31) 藤川隆男「オーストラリアにおけるアイルランド系移民—聖パトリックの日に見るアイデンティティの変遷—」『岩波講座世界歴史19 移動と移民』岩波書店、1999年、95頁。

32) Garryowen (FINN, Edmund.), *The Chronicles of Early Melbourne, 1835 to 1852: historical anecdotal and personal*, Melbourne: Fergusson and Mitchell, p. 677. オレンジ・ロッジ (Orange Lodge: O'Farrell, Patrick, *The Irish in Australia*, Sydney: New South Wales University Press, 1986, p. 102.) や オレンジ会 (the Orange Society: Mike Cronin, Daryl Adair, *The Wearing of the Green: A History of St Patrick's Day*, London: Routledge, 2001, p. 45.) の名称が用いられている指摘もある。

聖パトリック会は1843年と1844年の聖パトリックの日を祝うパレードを行なった。同様のイベントとして、オレンジ協会 (the Orange Association) は1844年のオークリムの戦いの日(the day of the battle of Aughrim: 7月12日)にパレードを行うことを決めた。これに対して、7月9日のヘラルド紙に、また10日のガゼッタ紙に「カウンティ・クレアとカウンティ・ティペラリーの出身者の間で行なわれる50ポンドの賞金を賭けたハーリングの試合を観戦するために、7月12日の朝10時、バットマンズ・ヒル (Batman's Hill) に全てのアイルランド南部出身の入植者が集まるように」との広告が掲載された。この広告は、ハーリングのスティックや棍棒を持った人々を集める策略で、プロテスタントの人々、すなわちオレンジメン (the Orangemen) を威嚇することと、パレードをしているオレンジメンと町のストリートで戦うことを目的としていた³⁴⁾。

当日、指定された時間までに、「招集された軍隊」、身なりを整えた、鍛え上げられた身体のパトリックニアンたちは、棒や杖、ハーリングのスティック、そして、全ての考えられる木製の武器を持ち、決められた場所に集まり始めた。このため、オレンジメンのパレードは中止となり、大きな衝突はなかった。ハーリングの選手は素晴らしい日を過ごした。そして、フットボールも行われた。これが最初のフットボールだった。この日、特別に配置された警官は、特に大きな問題が生じなかったことを報告した。この日の出来事は、目的であったパレードの阻止を成し遂げたことに加え、何か緊急のことがあった際、物理的な力を供給できることを示した³⁵⁾。

史料の著者であるフィンは、「これが最初のフットボールだった」と述べている。この点に関して、オーストラリアあるいはメルボルンで行われた、など地域に関する事なのか、アイルランド式のフットボールが初めて行われたのか、など何が最初だったのかに関する言及はない。カトリックとプロテスタントの宗派対立は、アイルランド島内で生じていたが、移住先のメルボルンでもこの対立構造を持ち込んでいたようである。新聞は、戦闘を想起させるような単語を用いてその対立を煽っている。そして、この日のハーリングは、プロテスタントの人々を威嚇するために、人々を集めることを試み、結果として、武器として利用可能なハーリングのスティックや棍棒を持った人を多く集め、プロテスタントのパレードを妨害することに成功し、アイルランド・カトリックの連帯を示した。オークリムの日のパレードを妨害するハーリングは翌1845年にも計画される。

旗を振り、太鼓をたたく壮大なオレンジ・パレードを7月12日に開催することが計画された。これに

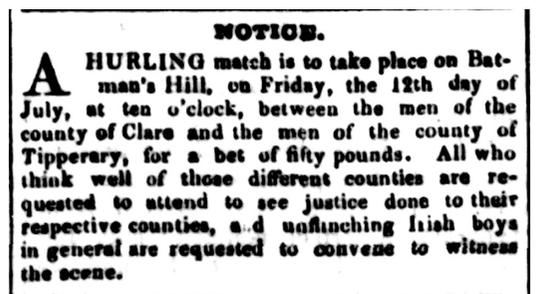


図2 ハーリングの試合の広告 (the Port Phillip Gazette, 1844年7月10日)

33) Garryowen, op. cit., p. 677.

34) Ibid., p. 677.

35) Ibid., p. 677, 678.

対して、前年同様、ハーリングの選手たちは、「ボールを強く打つ」とは異なる理由、すなわち、パレードを妨害するために集められた。プロテスタントとカトリック、それぞれの企ては秘密裏に準備された。最初に公的な情報として出たのが7月10日のヘラルド紙だった。7月12日にバットマンズ・ヒルで、アイルランド南部のマンスター地域のカウンティの対抗戦、ティペラリー、クレア、リムリック対ウォーターフォード、コーク、ケリーの各カウンティの合同チームによるハーリングの試合を開催するため、全ての若者が前年と同様、棍棒などを持ってくると書かれた広告が掲載された³⁶⁾。

前年のようなカトリック側の動きを察知したプロテスタントのグループは、町の治安判事長でもある市長に対して、ハーリングを鎮圧するよう要請した。このことに関して、市長は、メルボルンが戒厳令下でないことやハーリングが違法ではないこと、ハーリングのスティックや棍棒そのものは害のない子供のおもちゃであるとの見解を示し、この要請を断った³⁷⁾。

7月12日、この日は非常に天気の良い日となった。ハーリングの実施に不満のある人を除くメルボルンの住人がハーリングの試合に出かけた。観衆は数千人にも及んだ。ハーリングの選手たちは、試合会場であるバットマンズ・ヒルにいたが、街の様子を気にかけており、ゲームは得点することを目的とせずに続けられた。オレンジメンがパレードを始めたら、即座に妨害する予定だったが、オレンジメンは何も行わず、平静が保たれた³⁸⁾。

丘には軽食、ギャンブル、音楽テントはなかったが、強いウイスキーがあり、真のアイルランドのホスピタリティが共有され、お祭り騒ぎになった。3時頃に市長が登場し、この集まりに賛辞を送った。

そして4時頃、彼の指示で、ハーリングの試合は無期限の中断となった。こうして、ハーリングの試合は2度目の無血勝利を達成した。翌年以降、パレードが計画されることはなかったため、パレードを妨害するためのハーリングは行われなかった³⁹⁾。

1844年のハーリングの試合は、クレアとティペラリーのカウンティ対抗の試合となっていた。この時に多くの参加者を得たからか、翌年は対象地域を拡大して、マンスター地域の他のカウンティも加わっている。また、このようにカウンティ対抗でチーム分けされるのは、アイルランド島で行われているハーリングの形式と同様である。

フィンは、バットマンズ・ヒルの様子について、詳細に叙述していないが、当時の観衆が集まるようなスポーツイベントでは、軽食や音楽テントの準備、またギャンブルが行われていたことがこの記述から読み取ることができる。さらに、市長が終了を宣言するまで、ゲームが続いたことから、アイルランド島で行われていたハーリング同様、どちらかのチームが得点するまでゲームを継続するルールで行われていたと考えることができる。

ハーリングがパレードを阻止するために行われたという指摘は、フィンだけでなく、当時の人々の共通認識だった。1845年7月11日のアドバタイザー紙の「国内情報」に、この日のハーリングに関する記事がある。

オレンジ派の人々の記念日である7月12日にハーリングの試合が計画されており、アイルランド・カトリックの人々との衝突が予想される。もし、衝突が生じた場合、大きな事故になるので、市長は特別警官や軍を用いて、ハーリングの試合との距離をとらなければならないとし、予防措置が取られない場合、「バットマンズ・ヒルはゴルゴダの丘に

36) Ibid., p. 678.

37) Ibid., p. 679.

38) Garryowen, op. cit., pp. 679–680.

39) Ibid., p. 680.

40) the *Port Phillip Patriot and Melbourne Advertiser*, 1845年7月11日。

41) リボニズムはアイルランドの貧農の活動。

42) the *Port Phillip Patriot and Melbourne Advertiser*, 1845年7月12日。

なり、死んだ人々の頭蓋骨がころがる」と警告した⁴⁰⁾。

翌日のアドバタイザー紙の記事には、「オレンジ主義トリポニズム⁴¹⁾」のタイトルで、前日の記事の背景となったアイルランド社会の対立について書いている。そして、「この日リボン派はバットマンズヒルに集まる。表向きはハーリング或いはシンティの試合をやるということになっているが、オレンジ派がボイン川の戦いのパレードをしようとした場合、実質は棍棒を持って攻撃する集まりを作っている⁴²⁾」と批判し、両方の集団に挑発行為等を控えるよう発信している。そして、7月17日の記事で、ハーリングが行われたが、オレンジメンがハーリングをしている人々との衝突を避けたため、平穏が保たれた⁴³⁾ことを報告している。

このように、ハーリングはプロテスタントのパレードを妨害するために行われた。こうした宗派対立の事例を重ねることによって、ハーリングがスポーツとしてだけでなく、武器を持った人々を集めることやアイルランド・カトリックを表象する活動という意味が付与されていったと考えることができる。

V | おわりに

『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』には、1844年と1845年の二つのハーリングの試合に関する記述があった。ここから、当時のハーリングの実相とその社会的意味を検討する。ハーリングの試合に関する詳細な記述はなかったが、試合が広いフィールドで、ハーレーを持った人々によって行われること、また試合は得点が入るまで継続されることが叙述されていた。試合が行われる

際、通常、軽食や音楽テントの準備、またギャンブルが行われていたことを示す記述があった。

社会的意味として、このハーリングは、オークリムの日を祝うプロテスタントの人々のパレードを妨害する目的で、アイルランド・カトリックの人々によって企画された。ハーリングを実施するために、兩年とも、新聞広告が出され、試合当日、多くのアイルランドの人々が集まった。1844年の広告では、カウンティ・クレアとカウンティ・ティペラリーの試合を行うこと、1845年の広告では、マンスター地域のカウンティの合同チームで対抗戦が行われることが報道され、アイルランドの出身者に集まるように呼びかけている。『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』の著者であるフィンは、これが単なるハーリングの試合ではなく、スティックや棍棒を持った人々を集め、プロテスタントの人々のパレードを妨害するという、宗派対立のコンテキストの中でハーリングが利用されたことを指摘している。フィンは、アイルランド移民でカトリック教徒であることから、アイルランド・カトリックを支持する論調であるが、他の新聞もこのハーリングが宗派対立の意図で計画、実施されたことを述べている。

このような社会的な対立におけるハーリングの事例は、先行研究でも指摘がある。オ・マオルファバイルは、17世紀のハーリングに反イギリス色を与えた最初の記録を指摘している⁴⁴⁾。また、具体的な政治活動として、カトリック教徒に対する「十分の一税⁴⁵⁾」の抗議にハーリングのスティックを持って集まった記録や1848年には武装蜂起によるアイルランド独立を目指した青年アイルランド党とハーリングのクラブのつながりの指摘がある⁴⁶⁾。

43) the *Port Phillip Patriot and Melbourne Advertiser*, 1845年7月17日。

44) Ó MAOLFABHAIL, op. cit., 1973, p. 40.

45) 教会が教区民から収穫物の1割程度を徴収した税、カトリック教徒の農民は、地主がカトリックでもプロテスタントでも、国教会に税を支払わなければならなかった。

46) Ó MAOLFABHAIL, op. cit., p. 46.

1884年にGAAが設立された時、イギリス産の近代スポーツのアイランドへの流入に抵抗するため、反イギリスの方針を打ち出すことや、執行部に急進的なナショナリストが名を連ねたことから、GAAは反イギリスの政治的な組織であるとみなされていた。先行研究からGAA設立以前に散発的に生じたハーリングと政治活動の指摘は見られたが、本研究は、メルボルンのアイランド移民が、ハーリングを宗教的な対立の中で意図的に用いたことを明らかにした。ハーリングの政治的利用は、アイランド島のみにとどまらず、アイランド人が新たに移住した土地でも、アイランド・カトリックを繋ぐ役割を担い、政治的な機能を持っていた。

【附記】

本研究はJSPS科研費16K16519の助成を受けたものです。

Hurling in *The Chronicles of Early Melbourne, 1835 to 1852*

Masayuki Enomoto

The purpose of this study is to consider hurling played by Irish immigrants in the 19th century before the founding of the Gaelic Athletic Association (GAA), which has represented organised hurling since 1884. This study reveals that hurling was played in Melbourne based on *The Chronicles of Early Melbourne, 1835 to 1852*, a historical account written by Edmund Finn, who was also known as Garryowen, and published in 1888.

This chronicle describes hurling being played on the 12th of July in 1844 and 1845. On both days, a parade of Orangemen was planned as a celebration of the Battle of Aughrim. On the other hand, the Irish Catholics organised a hurling match as an excuse to gather a large throng armed with hurlies and shillelaghs, with the evident intention being of either frightening the Orangemen from their purpose or meeting the processionists on the streets to fight it out. On both days in 1844 and 1845, the ruse of the Irish Catholics succeeded. There were numerous hurlers and spectators with wooden weapons, with the hurlers having a glorious day while the Orangemen's parade came to naught.

This shows that not only was hurling played in Melbourne in the middle of the 19th century, but it also had a relationship with Irish Catholic activities, which were antithetical to Orangemen, and the display of physical force. The GAA since its founding has been based on

the Catholic church. However, this study reveals that a relationship between hurling and the Irish Catholics existed before the establishment of the GAA.